

富士論叢

第 66 卷 1=2 合併号
(2025)

〈原著論文〉

小学校におけるフラッグフットボールの授業研究
— 扱うボールの種類に着目して

井上航人 1

東京富士大学経営学部

【原著論文】

小学校におけるフラッグフットボールの授業研究
— 扱うボールの種類に着目して —¹

井上 航人

A study of flag football lessons in elementary schools
- Focus on the type of used balls -

Koto Inoue

Keywords: elementary school students, flag football, lesson study

Abstract

The purpose of this study is to clarify the extent to which differences in the success rates of passing and catching are observed when round ball (hereafter referred to as handball) and oval balls are used in flag football lessons for 4th and 6th graders at elementary schools, and to examine how the difference in the balls used in the lessons affects the strategies that students come up with.

This experiment involved a 9-hour flag football unit, including pre-tests and post-tests, for 51 students from two classes of 4th graders and 48 students from two classes of 6th graders at the same elementary school.

The following became clear from this study.

- (1) For 4th graders, catching while stationary and passing to a moving opponent is more difficult with an oval ball than with a handball, and for 6th graders, catching while moving is more difficult with an oval ball than with a handball.
- (2) One way to solve the problems with passing and catching that have been pointed out in flag football classes is to change the oval ball used in class to a handball, which would alleviate

¹ 本論文は、平成 27 年度日本体育大学大学院体育科学研究科に提出した修士論文を再分析・加筆したものである。

the individual skills required.

- (3) Compared to fourth graders, sixth graders can pass and catch handballs and oval balls to the same degree, so it seems that sixth graders do not need to change the ball from an oval ball to a handball.

I 研究の背景

文部科学省は、『小学校学習指導要領：体育編解説（2017）』のなかで、小学校体育科の改訂の趣旨について、中央教育審議会答申に則り、概ね次のように記述（抜粋）している。

- (1) 小学校、中学校および高等学校を通じて、体育科、保健体育科では、これらの課題を踏まえ、心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成することを目標とする。
- (2) 児童生徒の発達の段階を踏まえて、学習したことを実生活や実社会に生かし、豊かなスポーツライフを継続することができるよう、小学校、中学校、高等学校を通じて系統性のある指導ができるようにする。
- (3) 運動領域においては、全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができるようにし、その結果として体力の向上につながる指導等の在り方について改善を図る。その際、特に、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について配慮する。

この改訂趣旨の背景のなかで、とくに運動領域について、従前、(1) 技能（「体づくり運動」は運動）、(2) 態度、(3) 思考・判断としていたものを(1) 知識および技能（「体づくり運動系」は知識および運動）、(2) 思考力、判断力、表現力等、(3) 学びに向かう力、人間性等の内容構成にした点が挙げられた。また、中央教育審議会答申において、「体育については、『体育の見方・考え方』を働かせて、資質・能力の三つの柱を育成する観点から、運動に関する『知識・技能』、運動課題の発見・解決等のための『思考力・判断力・表現力等』、主体的に学習に取り組む態度等の『学びに向かう力・人間性等』に対応した目標、内容に改善する。」としていることを踏まえたものであると明記された。

小学校低学年の「ボール運動系」では、従前どおり領域名を「ゲーム」とし、その内容は「ボールゲーム」と「鬼遊び」で構成されている。中学年では、従前どおり領域名を「ゲーム」とし、

その内容は「ゴール型ゲーム」、「ネット型ゲーム」、「ベースボール型ゲーム」で構成されている。とくに「ゴール型ゲーム」においては、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲームと、陣地を取り合うゲームを取り扱うというものである。一方、高学年については、従前どおり領域名を「ボール運動」とし、その内容は「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」で構成されている。また、ゴール型は「バスケットボール」と「サッカー」、ネット型は「ソフトバレーボール」、ベースボール型は「ソフトボール」を主として取り扱うが、これらに替えて「ハンドボール」、「ラグビー」、「フットボール」など、その他のボール運動を指導することもできることが加わった。この中のゴール型に注目すると、ゴール型のゲームは、コート内で攻守が入り交じりながらゲームが展開されるところに特徴があり、ボールを操作する技術だけでなく、ボールを持たない動きもゲームパフォーマンスの重要な要素といえる（吉永, 2009; 高橋・立木・岡出・鈴木, 2010）。また、高橋・吉永（2010）は、ゴール型のボールを持たない動きに関して、「ゴール型では他の運動に比べ、ボールを持っていないときの動きが複雑であり、この動きを身に付けさせるには技術的にやさしい運動を採用する必要がある」と指摘している。このような考えから、近年、フットボールが注目されている（松元・松尾・加藤・齋藤, 2013; 坂田, 2022; 伊藤・奥村・岡出・近藤, 2022; 深田・大友・吉井, 2023; 秋山・岡出, 2024）。

フットボールの特徴として、ボールを持って走ることができる、サッカーやバスケットボールと比べてボール操作の技能はやさしい、プレイヤー全員が役割を持って参加できる、他のボール運動のボールを持たないときの動きに転移する能力を身に付けることができる、ハドルによる作戦の立案・修正により、作戦の成否を1プレイごとに振り返ることができること等が挙げられている（高橋・吉永, 2010; 吉永, 2011）。吉永（2011）は、「ゲームが流動的に展開されていくサッカーやラグビーなどのボールゲームでは、立案した作戦通りにプレイを実行することは容易ではない」と指摘している。これに対し、「個々の役割行動を明確にしたうえでプレイに臨むことができるフットボールでは、立案した作戦を実行したり、プレイの成否に基づいて作戦を修正したりする作戦学習が十分可能である」とも述べている。

しかし、フットボールについての先行研究を見ると、フットボールの課題として、星尾（2006）は、「必要とされるボール操作の技能がやさしく、作戦学習に最適であるといわれているが、実際にはパスおよびキャッチの能力には個人差が非常に大きい」と指摘している。また、鈴木（2011）は、「前方へのパスに難しさがあり、単元前半では失敗を目にすることが多い」と指摘している。このように、他のボールゲームよりも必要とされる技能がやさしいといわれているフットボールであるが、実際にはパスやキャッチについて、いくつかの課題が挙げられている。一方で、フットボールにおけるパスやキャッチの難しさについて指摘されているが、パスやキャッチの成功・不成功に直接関係すると考えられるフット

ボール特有の楕円球と、他のボールゲームで使用されている球形のボールとを比較した研究は十分ではないのが現状である。

II 研究の目的

本研究の目的は、小学校 4 年生および 6 年生を対象としたフラッグフットボールの授業において、丸いボール（以下、ハンドボールとする）と楕円球を使用したときに、児童のパスおよびキャッチの成功率にどの程度の相違が認められるのかを明らかにし、授業で扱うボールの違いが児童の立てる作戦にどのような影響を与えるのかを検証することである。なお、この研究において、次のように仮説を立てた。

（仮説 1）4 年生では、ハンドボールと楕円球を使用したとき、児童のパスおよびキャッチの成功率の差が大きい。

（仮説 2）6 年生では、投球能力、捕球能力ともに 4 年生と比較して高いと考えられることから、ハンドボールと楕円球を使用したとき、児童のパスおよびキャッチの成功率の差は小さい。

III 方法

III-1 実施期間

本研究は、2014 年生 6 月上旬から 7 月上旬にかけて、東京都の Y 小学校 4 年生 2 学級 51 名および同小学校 6 年生 2 学級 48 名を対象に、プレテストおよびポストテストを含めた 9 時間のフラッグフットボール単元を実施した。授業は、それぞれ 1 名の教師によって行われた。各学級の詳細は、以下のとおりである。

- ・4 年生 1 組：4 年生 1 組の児童 25 名を対象とした。授業ではハンドボールを使用し、教師歴 3 年目のフラッグフットボールの授業経験のない女性教師によって行われた。
- ・4 年生 2 組：4 年生 2 組の児童 26 名を対象とした。授業では楕円球を使用し、教師歴 27 年目のフラッグフットボールの授業経験のある女性教師によって行われた。
- ・6 年生 1 組：6 年生 1 組の児童 24 名を対象とした。授業ではハンドボールを使用し、教師歴 5 年目のフラッグフットボールの授業経験のある男性教師によって行われた。
- ・6 年生 2 組：6 年生 2 組の児童 24 名を対象とした。授業では楕円球を使用し、教師歴 11 年目のフラッグフットボールの授業経験のない女性教師によって行われた。

III-2 単元計画

4 年生、6 年生ともに単元計画は、Table 1 のとおりである。また、Figure 1 は授業中に使用したコートを図示したものである。授業については 4 年生、6 年生ともに、1 組はハンドボールを使用し、2 組は楕円球を使用してフラッグフットボールの授業を行い、ボールの種類以外の条件（単元計画、コートの広さ、フラッグの付け方、授業内でポイントとなる説明）は各クラスの担

任教師の協力のもと、可能な限り統一した。授業は、各クラスの担任教師 1 名によって行われた。なお、3 対 2 のゲームにおけるルールは担任教師と相談をしながら決定し、Table 2 のように設定をした。

Table 1 単元計画表

1	2	3	4	5	6	7	8	9
準備運動 本時の説明								
キャッチボール		サインパス2対0						キャッチボール
プレテスト	サインパス 2対0	サインパス 2対1	3対2のゲーム					ポストテスト
まとめ								

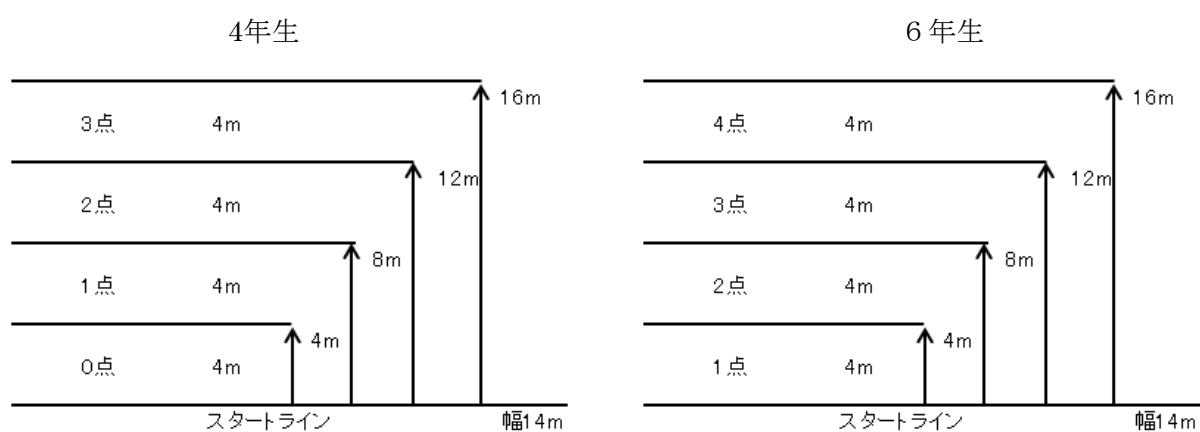


Figure 1 授業で使ったコート

Table 2 3対2のゲームにおけるルール

	内 容
I	攻めるチームはスタートラインからスタートする
II	攻めるチームはQB（投げる人）の「レディーゴー」の合図で動き始める
III	守るチームは4mラインの線上から開始すること
IV	ボールを投げていいのはQB（投げる人）のみ
V	QB（投げる人）はスタートラインを越えてボールを投げてはならない
VI	QB（投げる人）の投げたボールを味方がキャッチしたとき、そのまま走って奥に進んでよい
VII	攻めるチームは「ボールを落とす」、「DFにボールをカットされる」、「ボール保, 持者がDFにフラッグをとられる」、「ボール保持者のフラッグが落ちる」、「ラインから外に出る」のいずれかを行った時点で攻撃終了となり、その時点で到達したエリアに書かれた得点となる。なお、1つ目のエリアは、4年生は1点、6年生は0点とし、奥のエリアに進む毎に1点ずつ高くなる
VIII	故意の身体接触（相手を手で押す、相手の手をはたく、相手に体をぶつける）、審判や相手チームへの暴言等は禁止とする
IX	ポジションはローテーションで行い、ゲームに参加しない子は審判 得点係 得点カード記入係等を行う（人数の関係から得点カード記入係が行えない場合は、次の自分たちのハドルの時間の最初に、前回の攻撃では何番の作戦で何点取ったのかを得点カードに記入する）
X	ハドル40秒、8秒以内に攻撃→素早く攻守入れ替わりハドル40秒、8秒以内に攻撃→... の流れで交互に攻撃を行い、両チーム4回ずつ攻撃を行った時点でゲーム終了となる

III-3 分析方法

以下の項目について分析し、検討した。なお、統計的処理は統計ソフト（IBM SPSS ver. 20）を用いて t 検定を行った。

① プレテストおよびポストテストにおける得点率

単元始めと終わりに、ハンドボールおよび楕円球を使用した投球・捕球テストを行った。投球・捕球テスト時のコートは Figure 2 のとおりである。テスト内容は、大学院生と児童が向かい合った状態で立ち、ショート（5m）とロング（10m）の距離をハンドボールと楕円球の各ボールで1人につきパスを3回、キャッチを3回行い、それを得点化し、得点率（獲得した得点÷獲得できる最高得点×100%）を算出した後、ディフェンス無しの状況かつ静止状態でのハンドボールと楕円球の得点率の比較を行った。これにより、児童にとって静止した状態ではハンドボールと楕円球のどちらのボールの方が投げやすいのか、あるいはどちらのボールの方が捕りやすいのかを検討した。得点の付け方は、Table 3 のとおりである。

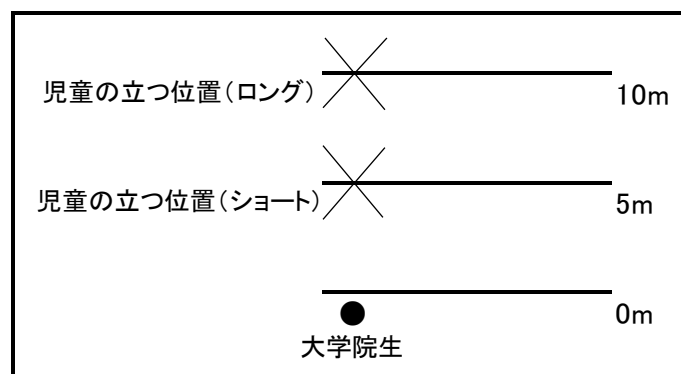


Figure 2 プレテストおよびポストテスト時のコート

Table 3 プレテストおよびポストテストにおける得点の付け方

	パス	キャッチ
0点	相手に届かない	投げられたボールをキャッチ失敗
1点	届いてはいるが、一歩動いても両手でキャッチできない位置に投げている	投げられたボールをキャッチ成功
2点	一歩動けば両手でキャッチができる位置に投げている	
3点	一歩も動かずに両手でキャッチができる位置に投げている	

② サインパス 2 対 0 におけるパスおよびキャッチの成功率

サインパス 2 対 0 とは、ペアで相談し、あらかじめ走るルートを決めておき、そのルートを走る仲間にタイミングよくパスをするというものである。

成功率 (成功回数÷試行回数×100%) は、2 単元目から 8 単元目に行うサインパス 2 対 0 における各ボールのパスおよびキャッチの試行回数と成功回数から算出し、1 組 (ハンドボール) と 2 組 (楕円球) の動きながらのパスおよびキャッチの成功率の比較を行った。ここでは、ディフェンス無しの状況での動きながらのパスおよびキャッチの成功率の比較を行った。これにより、動いている相手に対しハンドボールと楕円球のどちらのボールの方が投げやすいのか、あるいは動いている状態ではどちらのボールの方が捕りやすいのかを検討した。

③ 3 対 2 のゲームにおけるショートパスとショート以外のパスの発生割合

4 単元目から 8 単元目に行う 3 対 2 のゲーム中のショートパスと、ショート以外のパスの発生

割合を1組（ハンドボール）と2組（楕円球）で比較を行った。具体的には、3対2のゲーム中、攻撃側の投げる児童が、どの地点の味方にパスを投げたのか、あるいは味方の投げたボールをどの地点でキャッチしたのかを、ビデオカメラで撮影した映像をもとに分析した。5m以内の距離でパスおよびキャッチを行っていればショートパス、5mよりも遠い位置でパスおよびキャッチを行っていればショート以外のパスと定義した。これにより、扱うボールの違いが児童の立てる作戦にどのような影響を与えるのかを検討した。

なお、本研究では、扱うボールの違いによって児童がゲーム中に行うロングパス攻撃とショートパス攻撃の割合に影響を与えると仮定している。そのため、児童がゲーム中に行うパス攻撃の種類をショートパス攻撃かショート以外のパス攻撃に分類し、ゲーム中に行うパス攻撃の種類から、児童の立てる作戦への影響について検討を行った。

3対2のゲームでは、ゲーム中に行うパス攻撃の種類から児童の立てる作戦への影響について分析するため、攻撃側の攻撃の種類を、パスおよびキャッチを5m以内の距離で行っていればショートパス、5mよりも遠い距離で行っていればショート以外のパスと定義した。しかし、プレテストおよびポストテストでは、2つの距離のパスおよびキャッチの成功率を算出するため、5mの距離をショート、10mの距離をロングと設定しており、分析項目によって定義は違うものとなっている。

Ⅲ－5 研究倫理

本研究は、日本体育大学倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：014-H27）。また、実験参加者となる児童には、方法を説明しインフォームド・コンセントを得た。なお、研究における利益相反はない。

Ⅳ 結果

Ⅳ－1 4年生のハンドボールと楕円球における得点率

Table 4, Table 5 は、4年生のプレテストおよびポストテストにおける得点率の結果、Figure 3, Figure 4 は、結果を図示したものである。なお、表に示した得点率は、「獲得できる最高得点」を分母、「獲得した得点」を分子として算出し、各クラスの平均を求め、クラスごとにハンドボールと楕円球の得点率の比較を行った。

Table 4 4年生におけるハンドボールと楕円球の得点率 (プレテスト)

	ハンドボール	楕円球
ショートパス	87.5%	85.5%
ロングパス	28.4%	35.8%
ショートパスのキャッチ	96.1%	89.7%
ロングパスのキャッチ	78.5%	56.4%

Table 5 4年生におけるハンドボールと楕円球の得点率 (ポストテスト)

	ハンドボール	楕円球
ショートパス	87.2%	86.7%
ロングパス	29.6%	30.9%
ショートパスのキャッチ	95.5%	91.5%
ロングパスのキャッチ	81.8%	66.2%

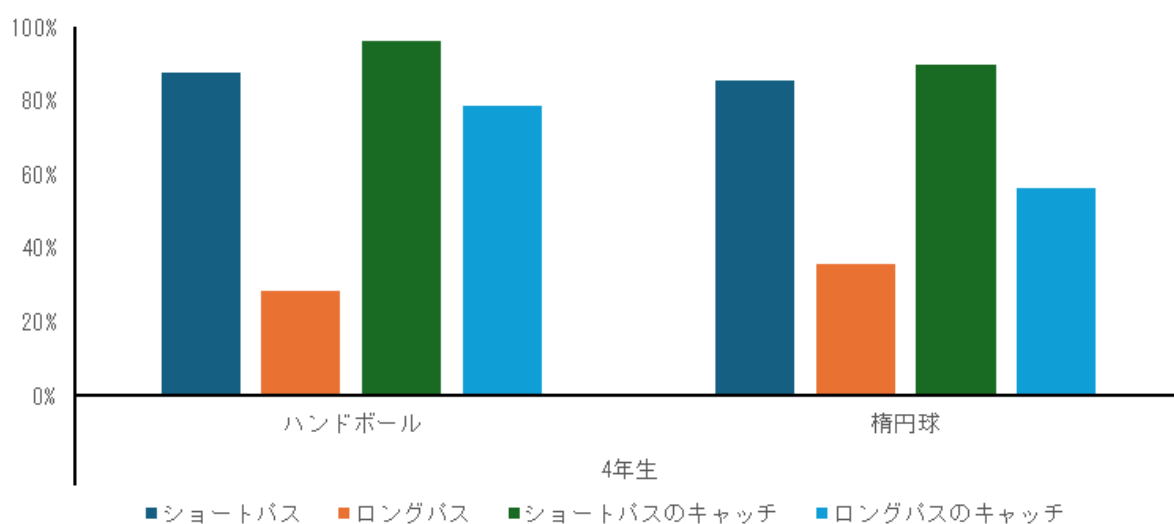


Figure 3 4年生におけるハンドボールと楕円球の得点率 (プレテスト)

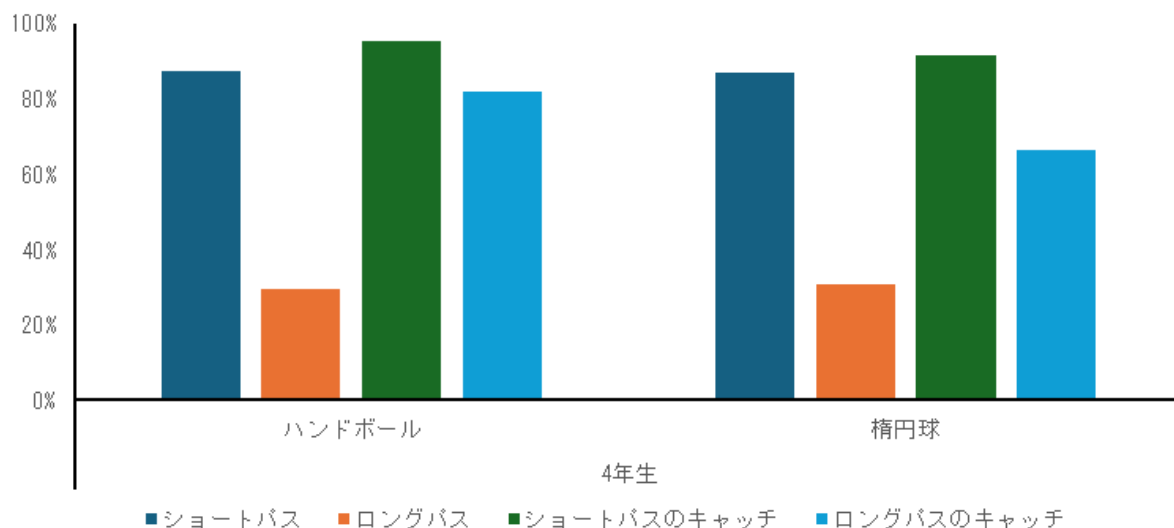


Figure 4 4年生におけるハンドボールと楕円球の得点率（ポストテスト）

ハンドボールを使用してフラッグフットボールの授業を行った4年生のプレテストおよびポストテストの結果について、プレテストのパスに関しては、ハンドボールのショートパス（87.5%）は、楕円球のショートパス（85.5%）よりも高い得点率を示した。一方、ロングパスにおいては、ハンドボール（28.4%）よりも楕円球（35.8%）が高い得点率を示した。ポストテストのパスに関して、ハンドボールのショートパス（87.2%）は楕円球のショートパス（86.7%）よりも高い得点率を示した。一方、ロングパスにおいては、ハンドボール（29.6%）よりも楕円球（30.9%）の方が若干ではあるが得点率が高かった。パスに関して、プレテストとポストテストの間で t 検定を行ったところ、いずれの組み合わせにおいても有意な差は認められなかった。

キャッチについては、プレテストのショートパスのキャッチでは、ハンドボール（96.1%）、楕円球（89.7%）、ポストテストのショートパスでは、ハンドボール（95.5%）、楕円球（91.5%）といずれもハンドボールの得点率が高かった。ロングパスのキャッチについては、プレテストのハンドボール（78.5%）、楕円球（56.4%）、ポストテストでは、ハンドボール（81.8%）、楕円球（66.2%）と楕円球のキャッチの得点率が低かった。キャッチに関して、プレテストとポストテストの間で t 検定を行ったところ、ロングパスのキャッチに関して、プレテストでは 1%水準、ポストテストでは 5%水準で有意な差が認められた（ $t=2.83$, $df=50$, $p<.01$, $t=2.25$, $df=50$, $p<.05$ ）。

IV-2 6年生のハンドボールと楕円球における得点率

Table 6, Table 7 は、6年生のプレテストおよびポストテストにおける得点率の結果、Figure 5, Figure 6 は、結果を図示したものである。なお、表に示した得点率は、「獲得できる最高得点」

を分母,「獲得した得点」を分子として算出し,各クラスの平均を求め,クラスごとにハンドボールと楕円球の得点率の比較を行った。

Table 6 6年生におけるハンドボールと楕円球の得点率(プレテスト)

	ハンドボール	楕円球
ショートパス	97.9%	92.4%
ロングパス	56.2%	60.0%
ショートパスのキャッチ	98.6%	97.9%
ロングパスのキャッチ	86.7%	77.8%

Table 7 6年生におけるハンドボールと楕円球の得点率(ポストテスト)

	ハンドボール	楕円球
ショートパス	98.4%	96.6%
ロングパス	66.9%	65.1%
ショートパスのキャッチ	99.3%	97.2%
ロングパスのキャッチ	92.4%	86.1%

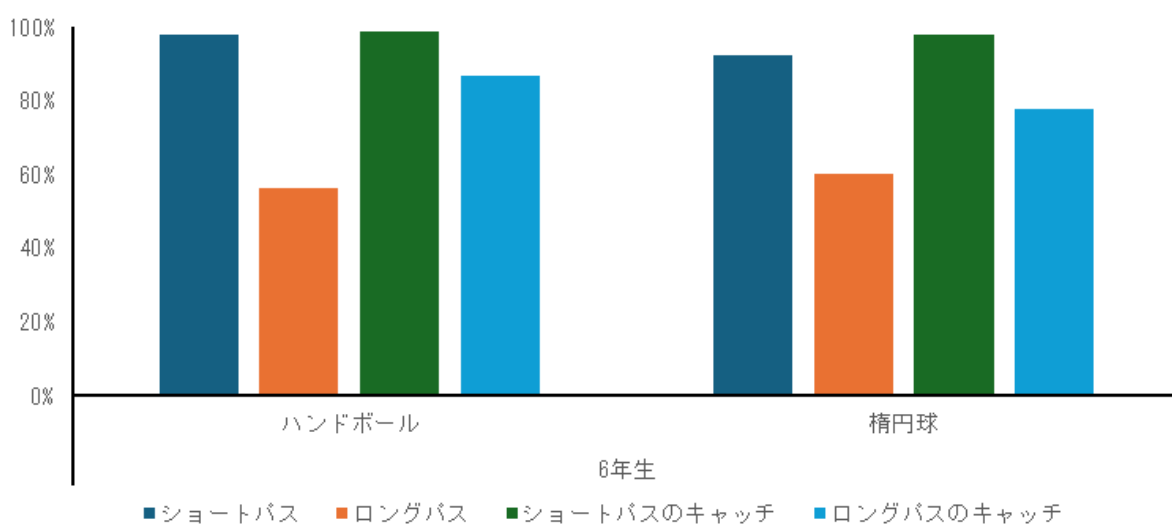


Figure 5 6年生におけるハンドボールと楕円球の得点率(ポストテスト)

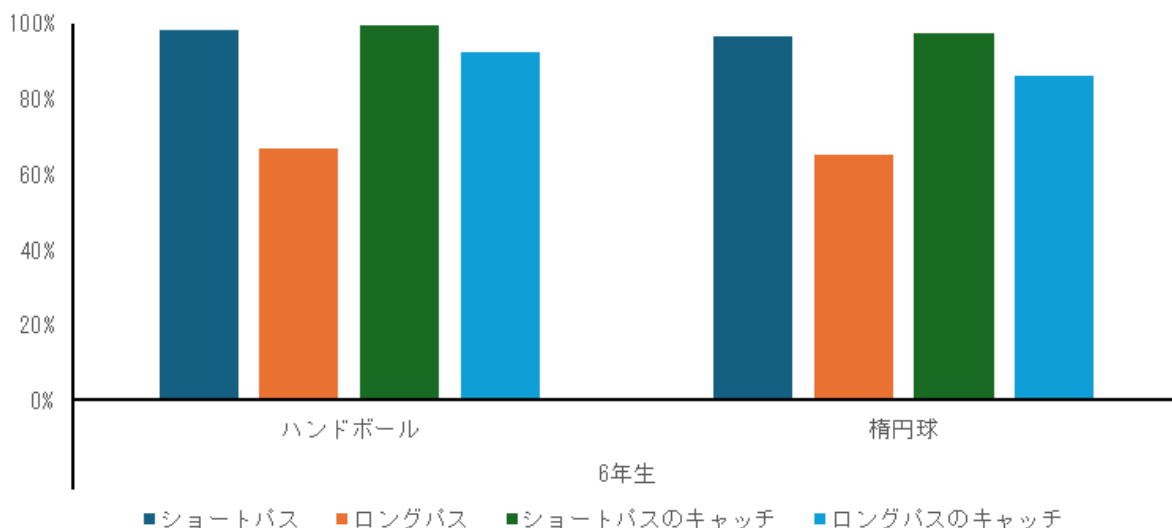


Figure 6 6年生におけるハンドボールと楕円球の得点率（ポストテスト）

ハンドボールを使用してフラッグフットボールの授業を行った6年生のプレテストの結果について、ハンドボールのショートパス（97.9%）は楕円球のショートパス（92.4%）よりも高い得点率を示し、ロングパスにおいてはハンドボール（56.2%）よりも楕円球（60.0%）と若干ではあるが高い得点率であった。次に、ポストテストでは、ハンドボールのショートパス（98.4%）は楕円球のショートパス（96.6%）よりもやや高い得点率を示し、ロングパスにおいてもハンドボール（66.9%）が楕円球（65.1%）よりも若干高い得点率を示した。パスに関して、プレテストとポストテストの間で t 検定を行ったところ、いずれの組み合わせにおいても有意な差は認められなかった。

キャッチについては、プレテストのショートパスのキャッチでは、ハンドボール（98.6%）、楕円球（97.9%）、ポストテストのショートパスでは、ハンドボール（99.3%）、楕円球（97.2%）といずれもハンドボールの得点率が高かった。ロングパスのキャッチについては、プレテストのハンドボール（86.7%）、楕円球（77.8%）、ポストテストでは、ハンドボール（92.4%）、楕円球（86.1%）と楕円球のキャッチの得点率が低かった。キャッチに関して、プレテストとポストテストの間で t 検定を行ったところ、ポストテストのロングパスのキャッチにおいて有意な差が認められた（ $t=2.1$, $df=47$, $p<.05$ ）。

V 考察

V-1 4年生のパスにおけるハンドボールと楕円球の得点率

プレテストにおけるショートパスの得点率については、ハンドボールが 87.5%であり楕円球は 85.5%であった。またロングパスの場合、ハンドボールの得点率は 28.4%、楕円球のそれは

35.8%であった。また、ポストテストでは、ショートパスの得点率について、ハンドボールが 87.2%、楕円球は 86.7%であった。また、ロングパスの場合、ハンドボールは 29.6%、楕円球が 30.9%であった。ショートパスにおいては、プレテストとポストテストのハンドボールと楕円球による得点率に方向性の違いがあるものの、85%以上の高得点であった。このことは、投げる距離が 5m と近いためにボールの球形による影響もあまりなかったと考えられる。また、ロングパスでは、ハンドボールよりも楕円球の方がやや高い得点率を示していた。しかしながら、それらの得点率は 35.8%以下という低い値であり、小学 4 年生にとってボールを 10m という距離に投げるロングパスが体力的に難しかったとののではないかということが可能性として考えられる。

V-2 4 年生のキャッチにおけるハンドボールと楕円球の得点率

プレテストにおけるショートパスのキャッチの得点率については、ハンドボール (96.1%) が楕円球 (89.7%) よりも高い値を示した。またロングパスのキャッチの場合も、ハンドボール (78.5%) の得点率は、楕円球 (56.4%) のそれより高かった。 t 検定の結果、ハンドボールのほうが楕円球のキャッチの得点率よりも 1%水準で有意に高かった。このことは、ショートパスのキャッチの場合は、5m の距離であるのに対して、ロングパスのキャッチは 10m となるため、投げられたボールの速度、ボールの形状などの要因が合わさり、4 年生の児童にとって楕円球のキャッチが難しかったのではないかと考えられる。

また、ポストテストでは、ショートパスのキャッチの得点率について、ハンドボールが 95.5%、楕円球は 91.5%とプレテストのときよりも高い値を示していた。このことは、授業を重ねていったことで、キャッチが上達したことと考えられる。ロングパスのキャッチの場合、ハンドボールは 81.8%、楕円球が 66.2%であり、ショートパスと同様にその得点率の値は高くなっていた。ロングパスのキャッチの場合、プレテストのときよりもそれぞれのキャッチの得点率は高くなっており、 t 検定の結果、5%水準でハンドボールの方が楕円球もキャッチの得点率が高かった。なお、プレテストの場合では、ポストテストよりもハンドボールと楕円球の得点率に違いが見られたが、ポストテストではその得点率の違いに有意な差が認められるものの、その得点率の差が狭くなっていた。このことは、プレテストと同様に授業の回数を重ねているうちにキャッチが上達していったことを示していると考えられる。

V-3 6 年生のパスにおけるハンドボールと楕円球の得点率

プレテストにおけるショートパスの得点率については、ハンドボールが 97.9%であり楕円球は 92.4%であった。またロングパスの場合、ハンドボールの得点率は 56.2%、楕円球のそれは 60.0%であった。また、ポストテストでは、ショートパスの得点率について、ハンドボールが

98.4%, 楕円球は 96.6%であった。また, ロングパスの場合, ハンドボールは 66.9%, 楕円球が 65.1%であった。ショートパスおよびロングパスにおいては, プレテストとポストテストのハンドボールと楕円球による得点率に方向性の違いがあるものの, 90%以上の高得点であった。このことは, 4 年生の結果と同様に投げる距離が 5m と近いためにボールの形状による影響もあまりなかったと考えられる。また, ロングパスでは, ハンドボールの方が楕円球よりもやや高い得点率を示していた。しかしながら, それらの得点率は 4 年生の結果よりも高い得点率を示していた。このことは, 身体の発育・発達学的にみて, 4 年生よりも 6 年生の方がより身体能力が発達していたと考えられる。

V-4 6 年生のキャッチにおけるハンドボールと楕円球の得点率

プレテストにおけるショートパスのキャッチの得点率については, ハンドボールの 98.6%が楕円球は 97.9%であった。またロングパスのキャッチの場合, ハンドボールの得点率は 86.7%, 楕円球のそれは 77.8%であった。6 年生になれば, ショートパス, ロングパスの距離の違いやボールの形状による影響も少なく, そのためキャッチの得点率が高くなったと考えられる。

また, ポストテストでは, ショートパスのキャッチの得点率について, ハンドボールが 98.4%, 楕円球は 96.6%とプレテストのときよりも高い値を示していた。このことは, 授業を重ねていったことで, キャッチが上達したことと考えられる。ロングパスのキャッチの場合, ハンドボールは 92.4%, 楕円球が 86.1%とショートパスと同様にその得点率の値は高くなっていた。ロングパスのキャッチの場合, プレテストのときよりもそれぞれのキャッチの得点率は高くなっており, t 検定の結果, 5%水準でハンドボールの方が楕円球もキャッチの得点率が高かった。なお, プレテストの場合では, ポストテストよりもハンドボールと楕円球の得点率に違いが見られたが, ポストテストではその得点率の違いに有意な差が認められなかったものの, ポストテストにおいては, 得点率も高くなりその得点率の差が広がっていた。このことは, 授業の回数を重ねているうちにキャッチの得点率がより高くなり, またボールの形状が影響したためロングパスのキャッチにおいてその違いが見られたと考えられる。

VI まとめ

本研究の目的は, 小学校 4 年生および 6 年生を対象としたフラッグフットボールの授業において, ハンドボールと楕円球を使用したときの児童のパスおよびキャッチの成功率にどの程度の差があるのかを明らかにし, 授業で扱うボールの違いがどのような影響を与えるのかを検証することであった。本研究から, 以下のことが明らかとなった

- (1) 4 年生では静止状態でのキャッチ・動いている相手へのパスに関してハンドボールより

も楕円球の方が難しく、6 年生では動きながらのキャッチに関してハンドボールよりも楕円球の方が難しい。

(2) フラッグフットボールの授業において指摘されている、パスおよびキャッチに関する課題を解決するための一つの方法として、授業で扱われている楕円球をハンドボールに変えることで、そこに必要とされる個人技術を緩和することができる。

(3) 4 年生では、静止状態でのキャッチおよび動いている相手へのパスにおいて、ハンドボールと楕円球の間に有意な差が見られ、ハンドボールの成功率が楕円球よりも有意に高かった。一方、6 年生では、プレテストおよびポストテストにおけるハンドボールと楕円球のロングパスの得点率の差は、1 組・2 組ともに 5%以下と小さい。また、静止状態でのキャッチおよび動いている相手へのパスにおいて、ハンドボールと楕円球の間に有意な差は見られなかった。これらのことから、4 年生と比較して 6 年生の方がハンドボールと楕円球を同じ程度パス・キャッチできているとはいえ、6 年生であれば扱うボールを楕円球からハンドボールに変える必要はないと考えられる。以上のことから、仮説 1 と仮説 2 が検証されたと考えられる。

なお、本研究の課題としては以下の 2 点が挙げられる。

(1) ハンドボールと楕円球のパスおよびキャッチの成功率を比較するため、ゲームはパス攻撃中心になるようルールを設定している。そのため、パス攻撃とラン攻撃が両方発生するルールでは本研究と違う結果となることが考えられ、パス攻撃とラン攻撃が両方発生するルールでは扱うボールの違いによる作戦への影響がどのような結果となるのかを検証する必要がある。

(2) 同一小学校の 4 年生 2 学級および 6 年生 2 学級を対象に調査を行っているため、他の小学校の児童であっても本研究と同じ結果となるのかを検証するために、より多くの児童・学級を対象に調査を行う必要がある。

引用文献

- 秋山和輝・岡出美則 (2024). 中学校体育授業におけるゴール型球技の攻撃に関する戦術の理解度, スポーツ教育学研究, 44(1), 35-52.
- 深田直宏・大友智・吉井健人 (2023). 小学校高学年体育授業のタグラグビーにおける攻撃のグループ戦術の習得に関する意図的学習配当時間および単元総学習時間の検討 ― ゲームで出現した攻撃戦術の通過率および出現率の分析を通して ―. 体育科教育学研究, 39(2), 61-83.
- 星尾尚志 (2006). 小学校体育におけるフラッグフットボールの教材化に関する研究. 教育実践研究紀要, 6, 71-80.
- 伊藤雅広・奥村拓朗・岡出美則・近藤智靖 (2022). 小学校 4 年生のフラッグフットボール作戦立案における発散的思考と収束的思考. スポーツ教育学研究, 44(2), 53-69.
- 松元剛・松尾博一・加藤達郎・齋藤まゆみ (2013). 小学校 6 年生におけるフラッグフットボールの作戦図に関する特徴. コーチング学研究, 27(1), 117-124.
- 文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説: 体育編.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf. 閲覧日: 2024 年生 11 月 20 日.
- 鈴木秀人 (2011). タグラグビーとフラッグフットボールの特性を考える. 体育科教育, 59(13), 10-14.
- 坂田行平 (2022). 小学校 4 年生の体育授業におけるフラッグフットボールの状況判断の発揮場面に関する事例研究 ― 学習グループの児童の発話に着目して ―. 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」, 3, 356-365.
- 高橋健夫・立木正・岡出美則・鈴木聡 (2010). 新しいボールゲームの授業づくり, 58(3), 86-91.
- 高橋健夫・吉永武史 (2010). 小学校「戦術学習」を進めるフラッグフットボールの体育授業. 明治図書出版.
- 吉永武史 (2009). ボールを持たない動きの習得を企画したサポート学習. 体育科教育, 7(11), 14-15.
- 吉永武史 (2011). 陣取り型のボールゲームが持つ学習可能性. 体育科教育, 59(13), 15-18.

執筆者紹介

井 上 航 人 東京富士大学経営学部 専任講師

清水太陽「地方中核的銀行による銀行合同の開始－武州銀行を事例として－」は、著者の申し出により、掲載を取りやめました。

東京富士大学図書紀要委員会

青山 和正 浮谷 秀一 隅田 浩司 (50 音順)

富 士 論 叢 66 巻 1=2 合併号
2025 年 3 月 1 日発行

編集 東京富士大学図書紀要委員会
発行 東京富士大学経営学部
学長 青山和正
東京都新宿区高田馬場 3-8-1
電話 (03)3368-8826

THE FUJIRONSO

Studies in Economics, Business Administration, and the Liberal Arts

Vol. 66, No1=2
(2025)

〈論文〉

*A study of flag football lessons in elementary
schools -Focus on the type of used balls -*

*Koto INOUE
Junior Associate Professor,
Faculty of Business
Administration, Tokyo Fuji
University*

1

Faculty of Business Administration
Tokyo Fuji University
TOKYO JAPAN